

肘折温泉郷（山形県大蔵村）、いわき湯本温泉（福島県いわき市）、増富温泉（山梨県北杜市）、熱海温泉（静岡県熱海市）、関金温泉（鳥取県倉吉市）、三朝温泉（鳥取県三朝町）等で実施されている。

大分県竹田市は、期間中、竹田市内に延べ3泊以上宿泊した人を対象に保健適用する温泉療養保健システムを導入し、長期滞在者の増加を目指している。

②夢の実現の場

2008年に日本温泉協会が実施した第50回「旅と温泉展」アンケートでは、温泉地に常設してほしい施設やサービス（複数回答）として、観光ガイド（53・8%）、散策の案内（41・5%）を挙げる回答が多かった（日本温泉協会『温泉』80巻1号（2012年1月））。

また、内閣府『高齢者の地域社会への参加に関する意識調査』（2010年度）で、地域活動に参加したいとする回答は過半数だった。地域の奉仕活動に実際に参加するための条件は、自分自身が健康である、時間や期間にあまり拘束されない、一緒に活動する仲間がいる、活動場所が自宅から離れていない、作業で肉体的な負担が重くない、の順だった。

温泉地の高齢者が無理のない範囲で観光ガイド等として活動し、観光客と交流することで、観光客、温泉地の住民双方の夢を実現できる。大分県別府市で始まった住民が地域の魅力を発信する体験交流型イベントを開催するオンパクは18か所に広がった。

これまで旅行をあきらめていた人の夢も実現できる。SPIあ・える倶楽部の介護旅行にはトラベルヘルパー（外出支援専門員）が同行する。トラベルヘルパーは、ホームヘルパー2級（現・介護職員初任者研修修了者）以上、かつ日本トラベルヘルパー協会のトラベルヘルパー養成講座を修了した介護旅行のプロで、移動中の介助や入浴、食事のサポート等を行っている。利用者には、腕の麻痺した人の腕が上がった、認知症の人がかつての表情を見せた、再び旅行に行くようになったなどの効果が見られる。

2000年に交通バリアフリー法が施行され、鉄道駅等における段差の解消などは進んだものの、車両や旅館・ホテル、観光施設等のバリアフリー化が途上にある中、同社は交通事業者や旅館・ホテル等と相談しながら、人海戦術で物理的なバリア

を克服している。

旅行費用を安くするためトラベルヘルパーを全国各地に配置する取り組みも進んでいる。静岡県東伊豆町には東伊豆トラベルヘルパーセンターが開設され、熱川温泉をはじめとする町内の温泉地への介護旅行利用者の着地における受け皿となっている（写真）。山形県最上町なども地域を挙げてトラベルヘルパーの育成を進めている。

③世界の人々が交流する場

現在、団塊世代などアクティブシニア市場が注目されているが、団塊世代も10年後にはほとんどが75歳以上となり、身体機能の衰えから旅行に行きたくても行けなくなる。トラベルヘルパーを活用しても、人口が減少する以上、国内市場への依存には限界がある。

そこで、政府は観光立国推進基本計画で2016年までに1800万人、2022年初めまでに2500万人の訪日外国人旅行者数を目指している。観光庁『訪日外国人消費動向調査』（2012年）において、今回したこと（複数回答）として37・7%、次回したいこと（複数回答）として47・3%が温泉入浴を挙げた。温泉入浴は次回したいことで

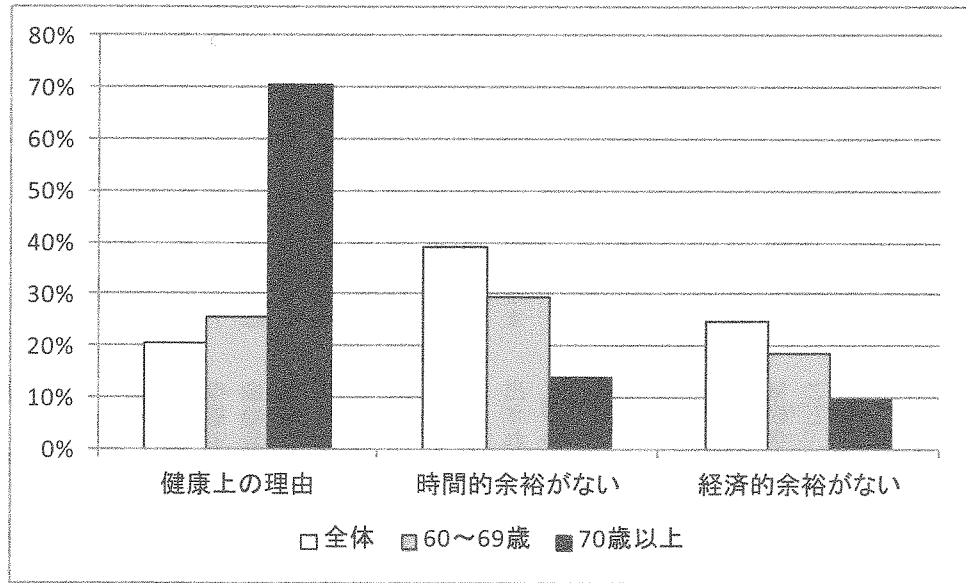
は2位で関心も高い。

『訪日外国人消費動向調査』（2012年）によると、出発前に得た旅行情報源で役に立ったもの、日本滞在中に役に立った旅行情報源ともインターネットを挙げる回答が多かった。また、日本滞在中にあると便利だと思った情報は交通手段、飲食店、宿泊施設、観光施設、買物場所の順だった。温泉地全体に関するインターネットでの情報発信が求められる。

長野県白馬村の Hakuba Tourism は豪州、和歌山県田辺市の田辺市熊野ツーリズムビューローは欧・米・豪州を主なターゲットに情報発信、外国語案内表示充実、海外でのプロモーション、着地型観光商品開発等に着手した。最初は地域特性を踏まえたターゲットを絞った対応もカギとなると思われる。

（なお、文中意見に係る部分は全て筆者の個人的見解である。）
まとめ
温泉地は、時代の変化とともに湯治場から観光地へと転換し、団体旅行客の受け皿として発展したが、バブル崩壊や団体旅行客の減少等も踏まえ、新たな来訪者の受け皿としての機能強化が求められる。具体的に

図5 宿泊観光旅行をしなかった理由（複数回答）



出典：日本観光協会 『観光の実態と志向』（2010年度）

参考文献
 今井啓子＋SUDI（2012）『オヤノタメ商品ヒ

は、人口動態の変化を受けた超高齢社会への対応、また、国際観光市場の拡大に対応した外国人観光客の一層の受け入れが重要になる。
 温泉地には、高齢者、外国人観光客いずれにも愛されている温泉という貴重な資源がある。温泉を最大限に活用しながら、健康づくりの場、夢の実現の場、世界の人が交流する場としての温泉地の機能を今ままで以上に強化し、個々の温泉地が持つ資源や魅力を生かして温泉地の活性化につなげることが期待される。



温泉入浴後の旅行者とトラベルヘルパー（写真提供：SPIあ・える倶楽部）

『ットの法則』集英社
 鬼頭宏（2007）『図説』人口で見る日本史』PHP研究所
 篠塚恭一（2011）『介護旅行にかけませんか』講談社